

所信表明

二〇二四年度中央常任副委員長選挙所信表明

中央常任副委員長候補

映像学部 三回生

恒吉 良輔

【1. はじめに】

この度、2024年度立命館大学学友会中央常任副委員長選挙に立候補いたしました、映像学部3回生の恒吉良輔と申します。正課授業では学部が配置する「5つの学びのゾーン」と『理論』と『実践』の往還的な学修」に則り、映像に関する科目を広く履修しています。またこれまで、講義内コンペティションへの複数回の優勝やオープンキャンパスへの学生代表作品の出演、西園寺奨学金の授与、父母会向けオープンカレッジへの学生代表としての出席、映像学部紹介パンフレットへの学生代表での掲載など、さまざまな貴重な経験をさせていただきました。

学友会中央パートでの活動では、2021年度の1年次から映像学部自治会に所属し、2022年度には副委員長を務めました。

た。そして2年次より中央事務局調査企画部に所属し、2022年度には次長を、2023年度には部長を務めています。本所信表明では、私のこれまでの活動を振り返り、2024年度中央常任副委員長選挙立候補に至った経緯と来年度の活動の方向性について述べさせていただきます。

【2. これまでの活動の振り返りと所感】

2-1. 映像学部自治会での活動
入学してまもなく所属した映像学部自治会での活動は、後の調査企画部での活動のきっかけとなるだけでなく、中央パートの持つ特徴と責任の大きさ、そして抱えている課題を体感的に知ることのできる重要な機会でした。

その具体的な体験として、①要求実現運動（2023年度からは学園共創活動と改称）（私が主体となって取り組んだ年度に合わせ、以下、要求実現運動とします。）と、②立命館大学学園祭2021の配信企画「FestivaLive!」及び2022年度に中央事務局に置かれた戦略企画室への協力で行った「りつくり2022」、③映像学部自治会オリター団との連携の3つを挙げて記述いたします。

まずは要求実現運動について。2021年度は映像学部自治会

の定める定数を満たさなかったことから学生大会は成立せず、学生集会として議論を進めることになりました。周りの友人に参加しなかった理由を尋ねると、「やっていたことを知らない」「何をするかわからない」「難しそう」などの答えが返ってきました。ここから私は広報の面で課題があると認識し、2022年度はそこに力を入れていきました。具体的には、映像学部自治会のマスコットキャラクターを用いて、例年より多くの広報をすることで、「学生大会」という言葉自体とその内容が学部生の目に触れる機会を増やし、親しみやすさを持たせました。その結果、2022年度は参加者数を3倍以上にすることができました。しかし、それでも学生大会が成立しない数であることや、この広報の方法を長く続けるのに難しい部分があること、学部生のための大会であるという認識が低いことなどの課題が浮き彫りになりました。2023年度の学生大会の参加者数が50人を下回る結果となったのが、その課題を実感させた一例です。

学生大会で取り上げられた議題に対しても、瀧口次期学園振興委員長が所信表明にて述べた「解決に至らなかった課題や、例年出てくるどうしようもない課題」を私はこの時からと感じていました。映像学部特有の学費の高さや抽選科目への対策など

が一例です。しかし、これに関しても動きがありました。先述の通り、2023年度から要求実現運動は学園共創活動に名を変え、大学側との懇談会などの数も増えました。この流れを続けていくという瀧口次期学園振興委員長の意向には私も賛同しており、学生の声を大学に届け、議題に対して単純な「YES、NO」の答えだけでなく、最適解が何であるかを考えて、大学側と共に一歩ずつ歩み、立命館学園を発展させていくことに寄与したいです。

次に立命館大学学園祭2021配信企画「FestivaLive!」と「りつくり2022」についてです。両方とも準備にかかる費用や時間に対して得られる目に見える成果が期待していたものより小さく感じ、当時の私はポジティブな見方をして参加し、最後まで楽しく完走することができませんでした。しかし、今振り返ると、前例のないゼロベースのものを創り上げるその姿勢自体が中央パートに新しい風を起こしており、積極的に参画したことは意義があると考えられます。また、両方のプロジェクトは規模が大変大きく複雑なことから、息切れせずに取り切り、次年度以降のことを考えて物事を進めることが難しいと感じています。そのため、後述する調査企画部の活動では、初めはシンプルにスタートさせその後少しずつ増やしてい

く事が大切だと考え、長く続けられることを念頭に置き続けてきました。そのような思考を持つきっかけ、つまり今の私の良いと思う物事の進め方のきっかけとしても、この2つのプロジェクトは有益なものであると感じました。

最後に、映像学部自治会オリター団との連携について。これは2022年度に力を入れた活動でした。私自身がこの年度にオリター団にも所属し積極的に活動していたこともあり、これまで以上に連携を取ることができました。その一例に、先述の2022年度映像学部学生大会が挙げられます。事前の広報面で深く協力してもらったことで当日の一回生の参加者を増加させることができ、また当日の議事進行をスムーズに行うためにオリター団の仲間にも役割を持たせ、共に学生大会を運営することができました。

大学生活のことを何も知らない一回生にとって、オリター団は頼りやすく心強い存在となります。私自身もその一人であり、両方にまたがっていたことから、双方の考える懸念点や発言の意図するところを理解し間に立って解決に導くことができましたし、生じてしまったトラブルの対処や企画の実現可能性の相談などにも、双方の意見に寄り添いながら取り組むことができました。

来年度映像学部は、情報理工学部と共に大阪いばらきキャンパスに活動拠点を移します。これまでとは異なる環境の中で、これまで以上の新入生サポートを行っていく必要がありますが、私が全力を尽くした2022年度の活動がその一助となれば大変うれしく思います。

映像学部自治会の活動全体を通じて、直接的に大学や中央パートと関わる場所であるからこそ、他の課外自主活動団体に所属し活動することではできない事ができると感じると共に、そのような場所だからこそ持たなければならない重い責任も感じました。また、ここでの活動は調査企画部での活動に直結したということもあり、ここで活動できて良かったと感じる一つの要因です。

2-2. 中央事務局調査企画部の活動を通して

先述の「FestivaLive!」がひと段落した後、私はここでの活動をスタートさせました。初めは自宅から大阪いばらきキャンパスが近く、そこで中央パートに何か貢献できないかという意欲から始まりました。実際に活動をしていくと、活動の幅広さに驚きながらも、様々な課外自主活動団体の活動支援や中央パートの仲間との交流があり、非常に刺激的なもので

した。

その中で私が長期間にわたり力を入れていたのは、初めての発行となる「立命館サークルコレクション英語版」の制作でした。

2022年度に新設された中央事務局グローバル化推進室と連携し、半年にわたり丁寧に制作を進めていきました。中身が英語に翻訳された状態のデータが完成したとき、そして完成した冊子が手元に届いたとき、秋新歓の際に手に取ってもらえたときの感動は大きく、学友会のグローバル化を一步前進させることができたことに喜びを感じました。

そして、新型コロナウイルスによる行動制限が緩和された2023年度の春季新規登録団体審査に多くの団体がエントリーしていたことや、日英合計約13000部印刷した立命館サークルコレクションの在庫が合計で2000部を切っていることなどから、課外自主活動の再びの活発化を肌身で感じることができました。同じ中央事務局の特別事業部が中心となって創り上げる立命館大学学園祭では、対外協力の休憩時間に日々の成果を発揮する課外自主活動団体の輝く姿を見ることができ、感動をも覚えました。

こうした心動かされる場面も多くある中で、いくつか課題も浮かび上がってきました。まずは「組み上げ」についてです。これ

は私も入部して一年経たずして感じていた課題で、引き継ぎの重要性を受け継ぐ側、引き継ぐ側の両方の立場から感じていました。部長になってからは、100ページを超える調査企画部マニュアルの整備や作業の効率化・単純化を実施することでこれに取り組みました。先述の通り、調査企画部の活動フィールドは広範で、課外自主活動団体や大学の学生部、中央パートの様々な部署と関わります。活動の基本をマニュアルに残すことで、中長期的に調査企画部の活動を維持し、応用部分に取り組みことのできる人数と時間を増やすことで発展にもつなげることができました。これは横尾次期中央常任委員長が所信表明で掲げた「先輩方が整理し組み上げた活動を基礎にしつつも変化を取り入れられる学友会」と連動した考え方だと考えています。2023年度も、今までであったものの整頓だけでなく、新しい広報媒体の運用に向けた動きや大阪いばらきキャンパスの学友会オフィス改装に向けた動きなど、頭も手も動かして向上・発展させることに繋げてきました。このような新しい挑戦は調査企画部だからこそ柔軟にできるものも多くあるため、2024年度以降も行いたいと考えており、現在も持続的に運用する方法の模索が続いています。

また、中央事務局の中でも連携が不足しているという、野崎次

期中央事務局長の見解は私も同じく持っています。普段の活動から中央事務局の各部署で、同じ事務局員として協力できるところは互いに手を取り合うことが必要であると考えています。2023年度においても彼女の述べた課題は、私の体験談としてもいくつか思い当たるところがありますが、一方で特別事業部側が手を差し伸べてくれた経験や、こちらが手を差し伸べた経験も思い浮かびます。よって連携できないわけがない、と私は信じています。互いにノウハウ共有をして関わりを増やすことで、連携を強化していけると考えています。

2-3. 中央パート全体での様々な人とのコミュニケーションを通して

中央パートの様々な部署の方々とは、中央パートリーダーズキャンプでの交流はもちろん、普段の活動の中でも可能な限りコミュニケーションをとることを心掛けてきました。これにより感じたことが2つあります。まず、たとえ誰も口に出していないことも、中央パートで精力的に活動していることや、それができていない場合にそのことに対し危機感を抱いていることは素晴らしいことであると私は感じています。横尾次期常任委員長が述べるように、慢性的に人手不足であると言われている中で、

各部署それぞれが特有の視点から一步一步行動していることを、もっと誇りに思っていて良いと感じています。これは野崎次期中央事務局長の述べる「期待感を持った学友会活動」と共鳴するところがあります。

しかしながら、私たちはあくまで学生です。2023年度、私は調査企画部員に「正課授業や自分の将来につながることを優先してほしい」と繰り返し伝えてきました。またこれが達成できよう、可能な限り効率化や共通化を行ってきました。これは横尾次期常任委員長の言う「課外自主活動らしさ」と最終的な目標が共通していると考えています。また、中央パートにおける「ワクワクを忘れずに」を押し出した活動により、中央パートの主体者の増加や学友会全体の更なる発展に期待しています。

【3. 立候補に至った経緯】

ここまで述べた通り、私は中央パートでの活動において、様々な経験を積んできました。これにより、様々な視点から物事を見ることができると考えており、来年度もこの中央パートで継続してインプットを続けていく所存です。そのような私が、これまでの経験と幅広い視野を活かしつつ、これからも精進しな

がら、学友会全体にどのような貢献することができると考えました。そして結論として行きついた答えが、今回立候補した中央常任副委員長の立場です。この役職は、大きく縛られずに様々なことに対し柔軟に動くことができると考えております。ここから先は、私が中央常任副委員長に就任した際に、どのようなことを掲げて活動していきたいかについて述べていきます。

【4. 来年度の活動の方向性】

4-1. 次期常任三役の意向に対する私ならではの視点の提供と、それにより生まれるものの質の向上

すでに決まった次期常任役員が所信表明等で示した、来年度の方向性および行っていきたいことを実現に向けて前向きに検討しつつ、そこに私のこれまでの活動から得た、考えるべき視点を導入することで、最終的に全学友会員に届けることのできるアウトプットの質をより良いものにできるよう努めていきます。まずは次期常任三役の考えることや、やらなければならないことに対し欠けていると感じる視点を提供し、やらなければならないことが迅速にかつ正確に進められるようにしていきます。そしてそれを乗り越えた先で、彼らの所信表明などに掲げられた、来年度あるいはそれ以降の学友会に必要と感じるものに対

して、同様に私ならではの視点を入れつつ、共に歩みを進めていきたいと考えています。

4-2. 中央パートの構成員の持つ様々な視点からの声を聞き、解決、改善及び向上にむけて何ができるかを共に考える

自治会と中央事務局という、課外自主活動にも、大学生活そのものにも広く関わる経験を積んできた私であれば、何を誰に尋ねるべきか、どれくらいの期間をかけてどのようなフローで物事の解決を図れるか、というノウハウを一定程度持ち合わせていると信じています。そして、他者と調和を取りながらコミュニケーションをとることに抵抗のない私であれば、中央パートで熱心に活動している仲間の声を適切な方法で適切な場所に届けることができると考えています。このようなアプローチの繰り返しやすらなるプラスの行動により中央パートの中を潤し、その結果全ての学友会員に送り届けることのできるものの質を高めることができると考えています。このように、「想いをカタチに」の理念を真正面から実現していくために活動をしていきます。これは灌口次期学園振興委員長の掲げる「学部自治会との連携の継続」にも連動するものであると思います。

4-3. 組み上げて、積み上げてきたものを発展させ、変化に長期間耐えうる学友会作り

私は、2023年度の学友会はしっかりとした地盤を築く、再開発の年であったと感じています。今一度中央パート各部署において、2023年度の組み上げの成果について振り返り、どのような成果があったかを問いたいと考えています。この時に、中長期にわたって精力的に活動するための土台を築けたと言えるところに関しては、2024年度はその継続による更なる地盤強化だけでなく、そこからどのようなものをその地盤の上に積み重ねていくかを考えていく必要があると思います。その積み上げていくものは、長く続けられるものであるか、またどれだけの還元性があるかについて考慮したものになっている必要があると思います。この点において、2023年度に調査企画部長を務める中で考えた、整頓とそこからの発展の思考を活かして関わっていきます。

一方で組み上げが不十分であったと感じている部署には、その理由を探り、改善する方法はないかを問い、改善に向けて何をすべきかのプランを共に考えていきます。ここではこれまでの映像学部自治会や調査企画部での活動の中で得た知識を発揮し、たうえで関わろうと考えています。

【5. 終わりに】

これまでの3年間、様々なことに取り組んできました。私はこれまででの活動を誇りに思っており、中央パートでの活動を通じて、入学時には考えもしなかったほどの成長をすることができております。恒吉だからこそできることがたくさんあると思います。中央常任副委員長になった際には、本所信表明で記載した内容を含め、より良いものにするために全力で取り組み、皆様と共に未来の中央パート、そして未来の立命館大学学友会を切り拓いていく所存です。

長くなりましたが、ここまでお読みいただき、誠にありがとうございます。ございました。

次のページより二人目の候補者による所信表明を掲載しています。

併せてご確認ください。

中央常任副委員長候補

政策科学部 三回生

林 嘉音

この度、2024年度中央常任副委員長に立候補いたしました、政策科学部3回生の林嘉音と申します。正課では、コミュニティ・ウェルビーイングゼミに所属し若者におけるコミュニティのあり方に関して研究しています。趣味は友達と美味しいものを食べに行ったり、ドライブに行ったりすることです。

学友会内での主な活動としては、1回生から政策科学部自治会に在籍し、2回生時に政策科学部自治会委員長、3回生時に政策科学部自治会副委員長と全学自治会執行委員を務めております。

本文では、立候補に至った経緯、これまでの学友会活動について、これからの学友会について順に述べていきます。

【立候補に至った経緯】

政策科学部自治会に所属することになったきっかけは、入学前のプレエントランス day の際、当時の政策科学部自治会の方に大学での学びに関して紹介していただいたことです。政策科学

部自治会では、2022年夏に活動するメンバーが減り、活動の継続が危ぶまれる状況になりました。そこで、私たちは学部生の代表として学部と話し合う存在であり、学部生の支援をする役割であると整理し、メンバー募集を行い、共に活動する仲間を見つけ、2023年の春には20人を超える1回生に入部してもらい活動が活発化しました。

私が高校生の頃に描いていた自治会の姿と委員長になった時の実際の姿には乖離がありました。多くの中央パートの組織でも同様に外からみるとうまくいっていても実は非常に積極的な少数の人たちが活動して回している団体も多く、人頼りの組織が既存として多くあります。その中で、人頼りであるほど、政策科学部自治会のように急激にメンバーが少なくなれば、活動に關しての引き継ぎ資料など過去資料がない状況では受け継がれなくなり、学友会全体に影響を与えることになります。そこで、政策科学部自治会のように活動の継続が危ぶまれる状況にならないように、課外活動らしい中央パートを指すとともに中央パートや学友会の存在をより多くの学友会員に知ってもらうことが重要であると考えていました。その中で次期常任の役の所信表明を見て、私もこの次期常任の役の皆さんと共に学友会を作っていく存在になりたいと考え、立候補をしました。

【これまでの学友会活動】

・政策科学部自治会での活動

大学に入学する前の特別入試合格者対象のプレエントランス day や学生自治の組織を知り、私もその一員として、大学生活の支援や学部の代表として活動に関わりたいと考え、入学後自治会に所属をしました。1回生の春学期には、1回生でありながらも春学期に1回生同士の関係性を構築する企画運営者として活動をしました。また、その後もOIC新棟に関する議論への参加、OICのオリター団同士の連携に関する議論への参加など活動をしてきました。2回生の時には、新型コロナウイルスの影響で例年できていなかった1回生同士の関係構築を目的として出店する「いばらき×立命館 day」が3年ぶりに実施されることになりました。政策科学部自治会には、政策科学部1回生を支援する役割があり、私が代表者として選出されました。代表者として1回生が縁日企画を出店できるように予算策定や準備・当日の支援などを行ってきました。しかし、当時自治会のメンバーが少なく、1クラス単位ではなく2クラス単位での出店になりました。そのため、目的であるクラス形成や仲間作りなど関係構築をするには1グループあたりの規模が大きすぎました。また、政策科学部自治会がサポートに入れずうまくクラスがま

とまらないというトラブルがありました。このような状況下でもいばりつを、やり遂げることができた経験は大規模運営担当者として非常に嬉しいものでありました。一方で、本来の目的を達成できなかったことは大変悔しい経験でもありました。また、2回生の5月の選挙において政策科学部自治会の委員長に選出され、委員長として活動をしてきました。しかし、私が委員長になった時の自治会は、活動があまり活発ではなく私自身も何をすべきか迷う状況であり、このままでは、自治会の存続が危ぶまれる危機でした。そのような中で、学部事務室、学生オフィス、全学自治会初年次担当の方と連携し、まず人材確保が急務であることから自治会の人員を集めました。そのためにまず持って私自身が自治会とはどのような権利があつて、どのような立場にいるものなのかに関して曖昧であつたため、新しい仲間にも自治会とは学部生の代表であり、学部の過去、現在、未来を学部と共に考え、行動する組織であり、そのために政策科学部自治会では、教学懇談会と呼ばれる五者懇談会の実施や上回生から1回生への大学生活の支援を行うことができる存在であると改めて整理しました。その結果、人材を確保するための説明会を開催し、最低限運営できるメンバーを集めることができました。秋学期には教学懇談会の実施と2023年度入学者に

向けたオリエンテーション企画、サブゼミ、いばらき×立命館 day の準備を行いました。教学懇談会では、学部執行部の先生や事務室と実現できるかできないかという回答を超えた、コミュニケーションの機会として、学部生の想いを伝え、学部執行部の先生や職員が答えてくれる場になるように調整し実施しました。また、2023年度入学者に向けて2023年度春学期の初年次支援として約10年ぶりのサブゼミを活用した初年次支援策を考えました。3回生では、2回生時に加わってくれたメンバーと共に政策科学会学生委員会と共同して新入生オリエンテーションの運営を行い、4月には自治会の新規メンバー募集を仲間と共に4月の月、水、金の毎日昼休みに説明会を実施しました。その結果、20人を超えるメンバーが加入し、約半年で政策科学部自治会の人材面の立て直しを行いました。また、5月に毎年実施される「いばらき×立命館 day」では、準備期間において1回生のサブゼミの運営や当日は統括的立場として政策科学部の1回生の出店団体の支援を行いました。また、5月下旬の選挙において後任に委員長役割を託し、副委員長として委員長の補佐として活動をはじめました。副委員長としては、教学懇談会を主に担当し、1回生に進め方の説明など次の代が主体的に取り組めるように支援や3、4回生向けのアンケートの作成や

議案書の作成、当日使用する全体のパワーポイントの作成や当日の司会進行を行いました。また、秋学期には、英語基準学生であるCRPS生との交流企画を実施しました。私は、当日の使用機材などに関して大学の関連するオフィスとの連携をいたしました。また、政策科学部運動会では、1回生の自治会執行委員が中心となって当日運営を行いました。私は運営する1回生が運動会を円滑に進めることができるように裏方として運営者としての動き方を教えることや音響や映像に関する機材レンタルの調整などを行いました。

政策科学部自治会では、執行委員が少ない中でワンオペに近い状態での運営をする時期もありました。当時、自分自身が活動する意義を失うときもありました。このような中で活動を辞めてしまっただけではいけないと感じ、関係する方と連携し、自治会の役割を整理し、メンバー募集を実施し、メンバーを集めました。そして、活動の活発化するために若手の育成を行ってきました。限界からの立て直しを経験し、仲間と共に活動する重要性に気づくことができました。

・全学自治会での活動

全学自治会には、2回生の3月ごろから参加し、OIC所属の自

治会を担当し、各学部自治会の支援を行ってまいりました。OICには、経営学部、政策科学部、総合心理学部、グローバル教養学部の4学部が在籍しており、4学部の自治会にそれぞれ特色や異なる課題感がある中で春学期の五者懇談会の開催に向けて、各学部自治会との定期的なMTGや活動状況の確認を行い、必要に応じて支援しました。無事に4学部とも春学期に五者懇談会を開催することができました。自治会ごとの個別面談を通して、各学部が抱える課題や悩みに関して気づくことができました。全学自治会として一歩引いて見ることやOIC所属の学部自治会以外の自治会を見ることで上手くいっている自治会との違いはなんなのか見比べることができ、学部自治会ごとの課題が見えてくるようになりました。課題を見つけることができ、必要に応じて支援を行うことで各学部自治会が解決に動き出しました。実際に秋学期以降各学部自治会に変化が訪れ自治会活動がより活発に活動してくれたことは非常に嬉しいと感じました。また、夏に開催された中央パートリーダーズ研修においてOIC以外所属の学部自治会と積極的にコミュニケーションをとり、OICが学友会への理解が少ないことが問題であると判明し、秋学期に全学自治会として自治会と関係が深い組織に実際にOICにお呼びして交流する機会を設ける企画を立ち上げ実施しまし

た。

全学自治会では、政策科学部自治会の時とは異なり、一步引いた目線から見ることによりこれまで気づけなかった課題に気づくことができ、主体者ではなく支援者だからこそ見える目線に気づくことができました。

【これからの学友会】

すでに決まっている次期常任の役のみなさんの所信表明を実現できるように、私がこの1年間自治会関係で活動してきたことを活かし、理想する学友会を共に作っていきたいと考えております。

私が当選した際にしていききたい活動

① 〰 役の公約を実現するために中央常任委員会と中央パートをつなぐ潤滑油になること

② これまでの経験から学んだ持続性の高い組織運営を学友会中央パートに伝播する

③ 明日も学友会で経験したいと思える場づくり

① ω 役の所信表明を実現するために中央常任委員会と中央パートをつなぐ潤滑油になること

中央常任委員会の方針に対して実際に行動を動かしてくれるのは、中央パートのみなさんです。中央パートのみなさんが私たちに共感を持ってもらい共に活動をしてもらうことが大切だと考えています。そこで私がこれまでの活動によって生まれた関係性を活用し、常任副委員長というある程度自由度の高い役割だからこそできる機会を活かしながら、積極的にコミュニケーションをとり、中央常任委員会と中央パート間でのズレを素早く感じとり必要に応じて対策を迅速に取れる中央常任委員会を目指したいと考えております。

② これまでの経験から学んだ持続性の高い組織運営を学友会全体に伝播する

政策科学部自治会の立て直しや全学自治会での自治会支援を通して、「やらされる」や「なんかよくわからない」という活動があればあるほど活動へのモチベーションが下がり、活動する仲間が減るということを知り、どんな活動をするのか言語化し、

組織内外に発信することの大切さに関して学びました。そこで、私は、自分たちがどんな人に影響を与え、何のためにしているのかを整理し言語化することが必要であると感じました。その上で次期中央常任委員長の横尾氏が掲げる「課外自主活動らしさを取り戻した学友会」の活動をしてもらうことで本当の私たちの役割を整理することができ、自由時間が増え、より特徴的な組織が生まれると考え、次期常任の役とともに課外自主活動らしさを取り戻した学友会になるように活動していきたいと考えております。

③ 明日も学友会で経験したいと思える場の提供

次期中央常任委員長の横尾氏が「独自性を持った自主的で自由な活動が行える」、次期中央事務局長の野崎氏が「期待感を持った学友会活動」と述べているように学友会活動に対して、課外活動らしさや活動への期待感を大切にしており、私自身非常にこれまでの経験から共感でき、共に学友会で自ら積極的に活動し、経験できてよかったと思える場を作りたいと考えております。そのためにもまず学友会でどのようなことが経験できたのかなどを積極的に発信し、共に活動する仲間へ期待感を上げることにより活動が活発になると考えております。また、中央パ

ー卜の様々な組織の人との交流の機会を作り、連携のみならず仲間を増やす機会を設け、ここでの経験が記憶に残り、明日も学友会で経験をしたいと思える場にしていきたく考えております。大学の限られた時間の中で学友会活動を経験できてよかったですと思える場づくりをしていき、その文化を次世代に繋がれる環境にしていきたいです。

【最後に】

私自身はこれまで中央パートの中でも自治会関連にのみ関わってきており、自治会以外の中央パートでの活動の経験がありません。今回の所信表明でも自治会に寄ったものになっていることは自分自身でも理解をしております。そのため私が当選させてもらった場合にはぜひ皆さんのことをもっと知りたいと思っています。よろしく願います。

政策科学部自治会での活動が止まる危機からの立て直しという減多に経験することができない、させてはならない経験をしてきた私が常任副委員長になることはこれからの持続可能な学友会を作る上で重要な指標であると自負しており、次期常任の役と今回の選挙で決まる常任副委員長と共に一年間学友会のために活動をしていきたいと思いますので、よろしく願います。

投開票日 二〇二三年一月二二日

二〇二三年度立命館大学学友会中央選挙管理委員会

同中央常任委員会